児童が主体的に取り組む音楽学習めざして

～６学年　歌唱指導を通して～

目　　次

Ⅰ　テーマ設定理由 …… 87
Ⅱ　研究仮説 …… 88
Ⅲ　研究内容 …… 88
　1.　実態調査 …… 88
　2.　音楽科における主体的学習の捉え方 …… 91
　3.　自ら学び音楽の喜びを味わう授業の構造図 …… 93
　4.　歌唱指導の手だて …… 94
　5.　学習過程の工夫 …… 95
　　(1)　導入の工夫 …… 95
　　(2)　学習形態の工夫 …… 95
　　(3)　評価の工夫 …… 97
　6.　声のカルテ …… 98
　7.　発声のしくみ …… 98
Ⅳ　検証授業 …… 99
　1.　題　材 …… 99
　2.　指導目標 …… 99
　3.　教　材 …… 99
　4.　指導にあたって …… 99
　　(1)　教材について …… 99
　　(2)　児童の実態について …… 100
　　(3)　指導について …… 100
　5.　指導計画 …… 101
　6.　本時の指導 …… 102
　　(1)　ねらい …… 102
　　(2)　展　開 …… 102
　　(3)　評　価 …… 103
　7.　授業研究会の記録 …… 104
Ⅴ　まとめと今後の課題 …… 106
　　主な参考文献・資料 …… 106

浦添市立宮城小学校教諭

石　嶺　球　代

児童が主体的に取り組む音楽学習をめざして

―器楽学習 教授指導を通して―

目　次

I　テーマ設定理由 …… 87
II　研究仮説 …… 88
III　研究内容 …… 88
1　実態調査 …… 88
2　音楽科における器楽学習の進め方 …… 91
3　自ら学び音楽の楽しさ味わう授業の構造図 …… 93
4　教授指導の手だて …… 94
5　学習過程の工夫 …… 95
(1)　導入の工夫 …… 95
(2)　学習課題の工夫 …… 96
(3)　評価の工夫 …… 97
6　声のパレット …… 98
7　楽器のしくみ …… 98
IV　検証授業 …… 99
1　題　材 …… 99
2　指導目標 …… 99
3　教　材 …… 99
4　指導にあたって …… 99
(1)　教材について …… 99
(2)　児童の実態について …… 100
(3)　指導について …… 100
5　指導計画 …… 101
6　本時の指導 …… 102
(1)　ねらい …… 102
(2)　展　開 …… 102
(3)　評　価 …… 103
7　授業研究会の記録 …… 104
V　まとめと今後の課題 …… 106
主な参考文献・資料 …… 106

鶴岡市立宮城小学校教諭

石　鶴　球　代

児童が主体的に取り組む音楽学習をめざして

～6学年　歌唱指導をとおして～

浦添市立宮城小学校　石　嶺　球　代

Ⅰ　テーマ設定理由

これからの教育は，①子どもの側に立った教育，②子どもが主体的に活動する教育，③自ら考え判断し，表現できる子を育てる教育が重要であると言われている。

これら3つの観点に立ってこれまでの自分の授業実践を振り返ったとき，教師主導型の授業が多く，子どもたちが主体的に取り組む場が少なかったような気がする。教師の願いのみが先行し，ときには児童不在の授業があったのではないだろうか。また，一斉学習の欠陥を補おうと何度かグループ学習やペア学習をとりいれ工夫してみたもののグループ学習が十分に機能してなかったり，あるいは一斉学習の場合でも，教師と一部の児童との一問一答になることが多かったような気がする。

指導要領では，「心豊かな人間の育成」「自己教育力の育成」「基礎基本の重視」「文化と伝統の尊重と国際理解の推進」が大きな柱として掲げられている。また音楽科の目標においては，「表現および鑑賞活動を通して音楽性の基礎を培うとともに音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育て，豊かな情操を養う」ということが示されている。小学校で培われた音楽性の基礎基本は，中学校段階で伸長され，さらに豊かな音楽性への発達が期待される。ひいては，それが生涯とおして音楽に親しむ心の育成にもつながると考えられる。

しかし現実には，私の場合そういうことが期待できるような授業はなかなかできなかった。その要因をかんがえてみると，

(1)　子ども達にみとおしをもたせてなかった。

(2)　その学習をとおしての充実感はどうだったか把握できていなかった。

(3)　学習形態のくふうが足りなかった。

(4)　音楽の表現を支えている基礎的な力の不足

など指導上の問題点が浮かんでくる。

高学年にもなると基礎技能力の差が著しいので，子どもたちがお互いに理解し合い，支え合い，それぞれの技能を積極的に駆使し，より主体的な学習活動ができたらと考える。

その手立てとして，

(1)　児童一人ひとりにめあてをもたせる。

(2)　個に応じた指導の工夫 → 充実感

(3)　学習形態の工夫

(4)　評価の工夫

等の指導の工夫が必要であると考える。

以上のことをもとに，「児童が主体的に取り組む音楽学習」をめざし，本研究テーマを設定した。

Ⅱ 仮 説

高学年の歌唱指導において児童自らが課題を発見し，問題解決するための児童中心の指導を行うことにより，主体的に取り組む学習態度が育つであろう。

Ⅲ 研究内容

1. 実態調査

(1) 調査目的……児童が音楽の授業に対して，また歌唱についてどのように感じているのか現状を把握する。

(2) 調査対象……4年生，6年生全クラス（4年137名・6年105名）

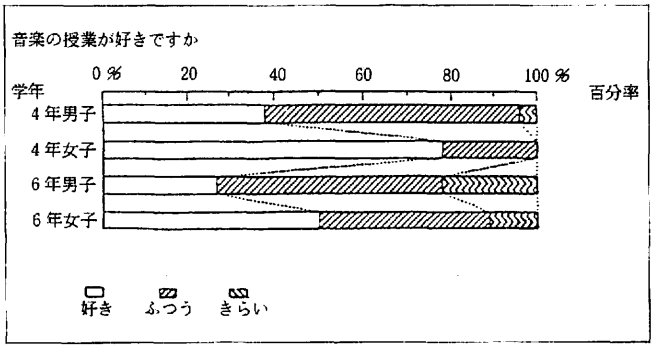
(3) 調査方法……選択肢による質問紙法

(4) 調査期間……平成5年・5月12日～5月15日

(5) 集計と分析……学年別・性別

【調査結果の分析と考察】

① あなたは音楽の授業がすきですか。



4年男女の「きらい」の率が低いのに比べ（4％，0％）6年生は高くなっている。進級して音楽室で授業できる期待がいっぱいの4年生は，後出の「今まで一番嬉しかったのは何ですかの問いで，「音楽室で授業できるようになったこと」と答えた子が8名いた。

反面，6年生は個々のもつ多様な問題（変声・はずかしい・技能面の差の広がり等）に加えて個別指導や教師の援助の怠りがあったのではないかと推察される。

② どうして好きなのか，または嫌いなのか5つのなかから選んでください。

4・6年　男女とも上位3位は次のとおりであった。

≪すきなわけ≫　・歌うと楽しくなる・いろいろな楽器が使える・美しい曲を聴いたり演奏したりできる。

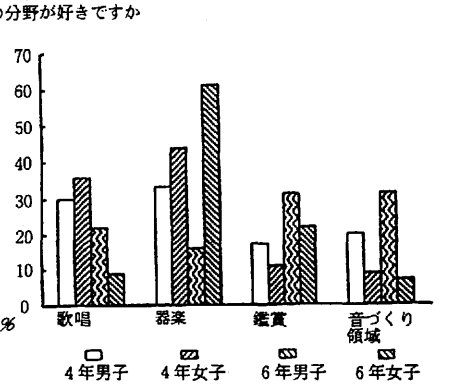
≪きらいなわけ≫・高い声がでない・学校で歌う歌はおもしろくない（6年のみ11名）似たことの繰り返しだからおもしろくない（6年のみ10人）

♪どの学年も，歌ったり合奏したり鑑賞したりすることを楽しく感じている。歌うことが楽しいと感じているにもかかわらず，きらいと答える児童がいることから発声法の指導にに問題があることがわかる。また教材の選択や授業形態の工夫が十分になされていなかったため授業への意欲を失わせてしまったのではないかと考えられる。

③　歌唱・器楽・鑑賞・音づくりの中で，どれが好きですか。

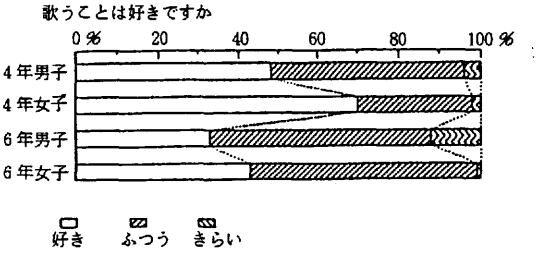
6年男子は訓練的素の多い器楽を避けるが技能的な差があっても，もちあわせている力の範囲内で十分活動できる音づくりや鑑賞は好むようである。

一方女子は両学年共，器楽を好む傾向がみられる。

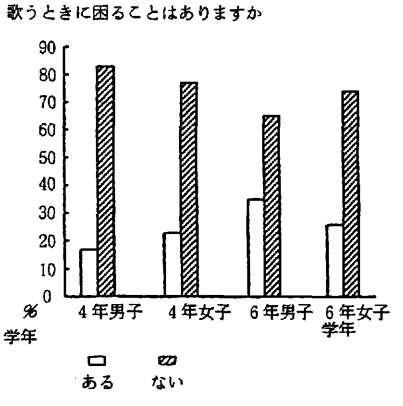


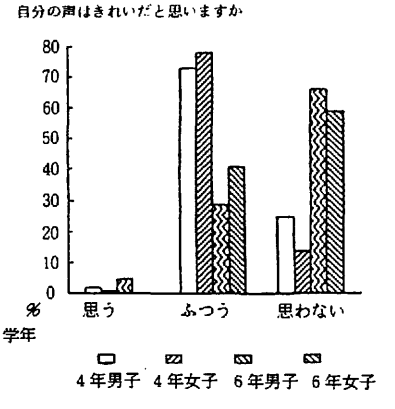
④　歌うことが好きですか。

6年男子に12%の「きらい」がみられるが他にほとんどが「好き」あるいは「ふつう」と答えている。



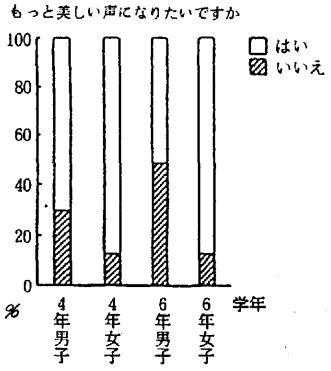
⑤　歌うときに困ることはありますか。
⑥　自分の声はきれいだと思いますか。

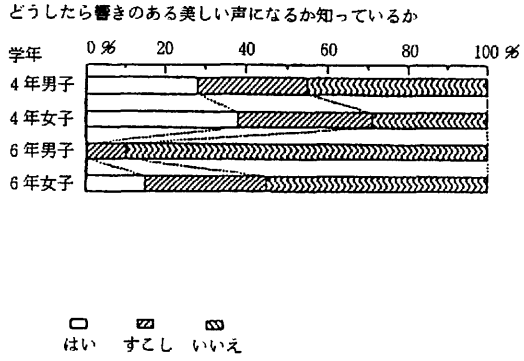




どの学年もほとんどの児童が「困ることはない」と答えているのに9割以上の子が自分の声はきれいだとは思っていない。

⑦　もっと美しい声になりたいですか。
⑧　どうしたら響きのある美しい声になれるか知っていますか。





ほとんどの児童が，もっときれいな声，響きのある声を求めている。しかし，どうしたらそのようになるのかわからないでいる。過去の授業の中で幾度となく響かせかた（表情・口型・呼吸など）を資料や実際の音を通して学習したはずだがよく身につけることができなかったのであろう。

⑨　音楽の授業で今困っていること，こうして欲しいな，ということを書きなさい。

≪4年生≫笛がふけない。

≪6年生≫音符がよめない・合奏をふやして欲しい・楽しい曲をたくさん教えてほしい。

♪音符が読めて，多くの音楽体験をしたいと児童の多くは前向きの姿勢である。

⑩　今までの音楽の授業で一番嬉しかった事を1つ書きなさい。

≪4年生≫　①ほめられたこと　②できたこと　③いい曲にであったこと

≪6年生≫　①できたこと　②ほめられたこと

♪合唱がうまく仕上がった，リコーダーで，ある曲を最後までふけた，学芸会の時担任や家族にほめられた，クラスの友達にほめられた等，学年に関係なく成就感をあじわったときや人に評価してもらったとき次の学習へ強い関心・意欲がわくことがわかる。

【今後の課題】

◎　児童の実態をいろいろな角度でしっかり捉える。
　　それぞれの実態に即し，適切な見通しの上に立って指導計画を作成する。

◎　音楽する喜びを味わわせるための指導法，授業形態の工夫をする。
　　（個・ペア・グループ・一斉）

◎　基礎基本の充実
　　（単に技能的なことだけでなく，友達のよさをみつけて，どんどん自分を伸ばしていくような力もふくめて）

◎　個人差を積極的に生かす

◎　評価の工夫（自己評価・相互評価）

◎　魅力のある教材のほりおこし・配列の工夫

◎　担任と音専との連携の工夫

2. 音楽科における主体的学習の捉え方

≪主体的に学ぶ授業とは≫

① 学びとったことをもとに考え，活動する授業

② 音楽を聴いて，美しさに気づき，美しさを発見し，また，曲の感じの違いに気づくような授業

③ 自分の力でやってみるという体験を多く取り入れた授業

④ グループで友達どうしが磨き合いながら，協力しあって学習する授業

と捉えることができる。

したがって，日々の授業の展開にあたっては，「自ら学ぶ音楽授業」の展開に努め，子どもたちに「自らつくりだす力」や「音楽の美しさを感じ取る力」を身につけさせる「**学び方を学ぶ**」指導法への転換が最も大切であると考える。

しかも，この指導法は，子どもたちが繰り返し繰り返し行う授業の過程で身につけていくものである。

またその様な学習活動を捉すために，ペア学習やグループ学習が有効であり，そこでうまれる主体的な学び方が生涯にわたって音楽を愛好し続ける大きな原動力となるといわれている。

児童の構え	学習過程	教師の構え
気づく 発見する おもいおこす	やる気・意欲	ひとりひとりの力を把握する やる気をおこさせる 意欲をもって取り組ませる
学び取ったことをもとに考える 自分の力でやってみる くり返し練習する	自分なりに取り組む	学習の主体を児童におく 学習のしかたを身につけさせる
友だちと協力してやる 友だちの演奏をよく聴く よりよい音楽をつくりあげていく	グループで取り組む	練習する時間はゆとりをもって基礎的な技能を定着させる
どんなところがよいか聴く 自分のグループとくらべる	全体の場で発表する	
できた わかった おぼえた よかった おもしろい	できた喜び 自信	演奏のよさをみつける 助言，指導を与える 新しい意欲を持たせる

≪期待されるペア・グループ学習の姿≫

① 子ども一人ひとりが自ら課題をもって，意欲的に参加している学習

② 一人ひとりの子どもが，個性・能力を最大限に発揮している学習

③ 子どもどうしがお互いに協力し励まし合いながら音楽を作り上げていく学習

④ 個人の考えが集団のなかで，生かされている学習

⑤ 子どもと教師の温かい人間関係がにじみでている学習

⑥ 音楽の基礎的基本的事項が着実に身につく学習

このような学習活動をとおして，児童がやる気をおこし，意欲をもって学習にとりくみ，鑑賞や表現活動をとおして音楽する喜びを味わわせる。これが次への自信となり新しい意欲となって，なおいっそう音楽に対して愛好心，愛着心を育てるものであると考える。

≪指導の個別化を図る努力≫

一斉指導の中で指導の個別化を図るためには，まず何よりも「児童が自らの意志で自分の学習を成立させる」という基本線に立たなくてはならない。

音楽科においては合奏や合唱など，集団での活動が多いが，それは決して集団ではなく最終的には，やはり一人というものにかえってくるからである。すなわち一人一人の子がどういう風に音楽することによって，いい音楽（いい授業）が創り上げられるということである。

そのためには次のような条件が必要となってくる。

① 自分の課題をしっかり捉えることができる。

② 自分で学習の方法や学習の筋道を捉えることができる。

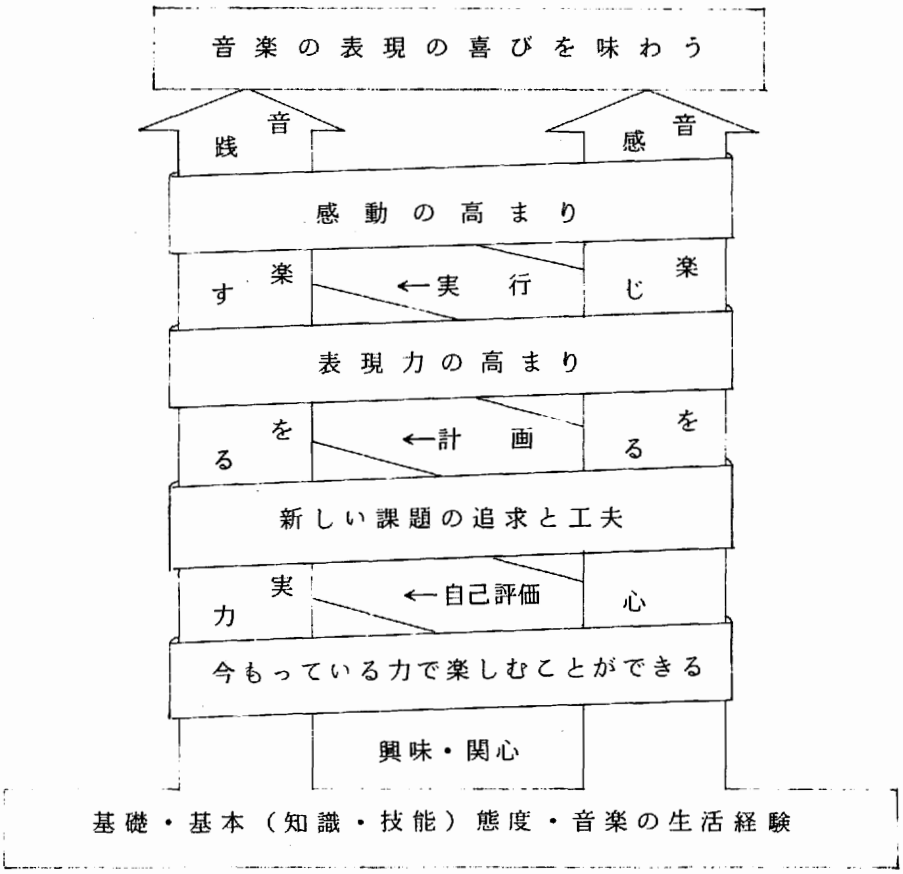
学習の手立てがわかる ── そのためには教師が普段からその方法を教えておく。
又，つまずきの内容を予想して授業に臨む。

③ 学習評価による評価カードづくりは，学習の方向づけと意欲の持続に効果をあげる。

④ 自分たちの学習の成果を評価しあうことができる。

学習のまとめとして相互に評価しあい達成への喜びや充足感を味わわせて次時への意欲へと発展させる段階である。この学習では，教師主導の一斉指導のなかではみられない思いがけない学習の成果に驚かされる。

3. 自ら学び音楽の喜びを味わう授業の構造図



(1) 音楽の≪学ぶ力≫は

音楽を実践する力（技），音楽を感じる心，音楽を生活化し広げていこうとする能力や態度などの要因がお互いに有機的に作用し合いスパイラルにたくましい実践力として成長する。

(2) 音楽科における「自ら学ぶ力」「自ら課題をみつけ解決する能力」を次のように捉える。

① 進んで音楽の美しさを求めようとする。

② この学習で何を学ぶのか，どんな方法を追求し，解決，発展させるか，学び方がわかる。

③ 美に対する感性をもち，音楽を実践するための知識，技能を身につける努力ができる。

④ 仲間とともに協力して音楽の喜びを分かちあうことができる。

⑤ 音楽を生活化することができる。

- クラブ活動，部活動
- 学　級　会
- お楽しみ会
- 家族で演奏して楽しむ
- コンサートへでかけての音楽鑑賞

4. 歌唱指導の手だて

音楽を聴いて「美しいな」「すばらしい。自分も歌ってみたいな」という心の変化がなけれ自ら音楽を実践し，求めることはできないであろう。

それでは，児童に興味・関心・意欲をもたらすために教師は何を考え，何をはたらきかけたらよいか。

① 教材選択の視点

授業の成功，不成功の大部分はまさに教材選択に起する，といっても過言ではない。魅力ある楽曲を教材にする。また，歌唱曲にリコーダーの簡単なオブリガートをつけることによって更に音楽する気持ちを高めることができる。芸術性，魅力性，適時性，系統性，個別性等を考慮して選択する。

♪ リズムが軽快で楽しい曲

♪ 旋律が美しくいつまでも心に残る曲

♪ 各パートに魅力的な動きのある曲（合唱曲）

♪ 詩情が豊かで夢があり児童に理解されやすい曲

♪ 詩の内容にドラマ性があるもの

♪ 伴奏が魅力的な曲

② 友人や先輩のよい演奏をみせる，きかせる（ＶＴＲ，テープレコーダーなど）

＃ 憧れを持たせる

＃ 歌い手の顔の表情，息づかい，口型がよく理解できる

③ 楽譜を説明するのにＯＨＰが有効

楽譜を見て音のイメージに替えていくという能力というのは，個人の興味・音楽体験によってかなりの差がある。だから楽譜をスクリーンに写して焦点化し説明すると，知識としての理解が早くそれは次元の高い音楽づくりに大きく役立つものである。

④ 学級担任と専科との「よい関係」は児童の歌心を倍にする。

・児童をみる眼をなるべく多く持つ → もっと児童の「個」に迫ることができる。

・学級担任は音楽の生活化の一番の協力者である。

・担任との連絡ノートをつくり毎時間の様子を知らせる ── 具体的にほめて育てる。

⑤ 児童に興味・関心・意欲を育てて感動する心へと導くのも教師の手だて

音楽学習の出発点は「楽しい」ことが前提条件だろう。ところが実技を伴なう教科だけに，はずかしい，できないから等の内面に起因することで自分自身で学習集団から離れ，自己を閉ざしている場合も多い。それを支えるのは，教師の認める心，揺さぶりかける情熱，そして，仲間の支え，学級の雰囲気，本人の意欲，成就感，成功感である。

⑥ なるべく「わかりやすい言葉」「具体的な言葉」で表現し，説明する。

音という見えないものを相手にしてるだけに，子どもにわかりやすいことばで説明する努力をしなければならない。

5. 学習過程の工夫

(1) 導入の工夫

授業の中で最も大事にしたい一瞬がこの時である。いろいろな状態で入ってきた子どもたちの心を音楽学習へ向けさせる。ここでは子どもたちの意欲をよく観察し，選曲や指示する言葉を工夫して進める。比較的によく用いられるのをいくつかあげてみる。

① 前時で学習した楽曲の復習から――最も穏当な方法だが，マンネリ化しがち。

② 新しい教材の指導から始める――魅力的で斬新な方法だが，いくつかの手段（手立て）を考えておかなければスムーズに入れない。

③ リクエストした歌曲をうたう――音楽科の授業の独特なテクニック。意外性や偶然性とともに子どもたちの自主的な意志が入っているので楽しい。リクエストする子は順番をきめ，必ず全員にさせる配慮をする。

集中力をもたせるとともに，音楽的雰囲気になじませ，心を開いていくことが導入の過程で最も大切にされなければならない事柄である。

(2) 学習形態の工夫

考え方の具体的ポイント

① こどもの発達によって，学習形態に工夫を凝らさなければならない。

② グループ学習においては，どのようなグループを構成すれば最も効果をあげるのか，十分考慮する。

③ 指導内容によってどの形態がのぞましいか考慮する。

一斉学習

全員に効率よく，同一内容や同一教材を同時にしかも短時間に指導できる形態で，また，同じ体験が期待できる最も基本的なものである。

合唱や合奏など，多人数による豊かな表現の素晴らしさを体験させる活動は，一斉学習を基盤としなければ成り立たないものである。また学級全員で音楽をじっくりと鑑賞する活動は，あたかも演奏会場におけるごとく聴衆が一体となり高まってくるような感動を，教室内に広げていく貴重な活動である。このように一斉学習には，音楽科独自の学習活動からみた必然性がある。（集団でなければできないよさがある）

しかし，この学習では，ややもすると教師中心の授業になりやすく，個人が集団の中に埋没しやすいという側面をもっている。したがって，この学習において適切な発問や助言をしたり，子ども相互に意見をやりとりさせたりして，多様な考え方，感じ方に触れさせる工夫が必要である。

グループ学習

少人数によるグループ学習は，一斉学習で学んできた学習内容を深め，子どもたちの意欲的・主体的な取り組みを大切にしながら，子供自らの手で音楽をつくり上げていくことをめざした学習形態である。

☆ グループ学習の特性

- 曲の感じをとらえたり，問題点を話し合うことによって曲に対する一人一人のイメージの拡大や集約がなされたり，問題点が明確になる。
- 他のグループの演奏と自分たちの演奏とを聴き比べて示唆を得たり，友達と一緒に楽しくアンサンブルができる。
- グループでの話し合いや練習の場面で，子ども同士が互いに教え合い励まし合うことになり，集中力が増す。
- アンサンブルや合唱，合奏において一人一人に応じた分担を工夫し，協力して音楽を創り上げていく体験を得ることができる。

このように，グループ学習では子どもの主体的，創造的な学習態度を育て社会性も身に付いていくことになる。

個別学習

個別学習は子ども一人一人の個別的な成長を図ろうとする形態である。

一斉学習やグループ学習の中で，自分一人で工夫したり練習したりする場を設定することで個々のペースで学習活動行うことができる。したがって，学習の遅れがちな子どもにとっても，進んでいる子どもにとっても学習意欲を高める重要な要因となるものである。

ペア学習

同じつまずきをもつ二人による学習，あるいは二人で教え合ったり助け合ったりする学習形態である。発声練習や階名唱等の練習のとき，個では気がつかない点を指摘してもらったりすることによってお互いに高めあうことができる。

このように，児童一人一人が生かされるために，様々な形の学習形態が設定可能である。ともするとマンネリズムになりがちな学習を，こうした学習形態の工夫によっても改善することができる。すなわち，児童の意欲的な活動を引き出したり，一人一人の持っている個性や能力を最大限に発揮させ，音楽学習の多様化を図るのである。

(3) 評価の工夫

従来の評価観 ― 学習の成果として身に付いた技能・知識などに評価の観点が集中する傾向があった。

新しい評価観 ― ○○ができたか，○○がわかったか，という結果よりも，めあてへ向かって意欲的に取り組んでいる，自分のイメージへ向けて表現を工夫している，といった一人ひとり子どもが学習している状況，自分の思いを実現しているプロセスを大切に見る → **評価の日常化**の必要性

自己評価カード ・ 相互評価カード の活用

① 演奏表現に対する自己評価

音楽の学習にあっては「音」そのものが，常に直接的に働きかけてくるために，好むと好まざるとにかかわりなく学習者も指導者も，評価を余儀なくされる。このことは，音楽学習上避けて通ることは不可能である。

そこで，逆に，この点に着目して積極的に「自己評価」をとりいれ，観点を明確にして自らの学習のめあてをつかませ，学習の深まりに対して意欲を育てることが大切である。

そのためには各自が成就感を得られるところ（少し難しいがやれそうだ）へめあてを作らせる工夫が必要になる。（前時は～まで，だから本時は～を）。

望ましい学習を成立させるためには，学習者自身が適切な目標を設定し，好ましい方法を工夫し，学習の過程や結果について，自ら批判・検討を加え自己評価しながら目標を達成していくことが大切なのである。

② 相互評価と振り返り

友達の表現を聴くこと → 友達のよさにふれる。

↓

自分の表現と比較し内容や方法を振り返る

↓

自分の表現を更に深めていく見通しをもつ

教師が両者の相違点を整理する →

↓

表現についての **気づき** が基礎・基本として

子どもの中に定着していく。

6. 声のカルテ

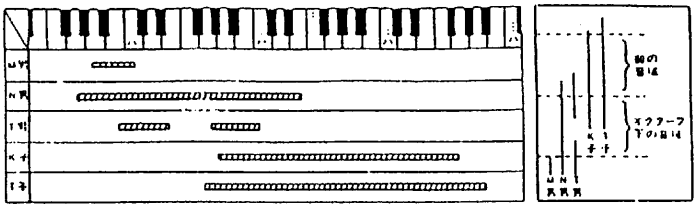
☆ 一人ひとりの声域の実態を把握することにより指導内容が明確になってくる。

☆ また，児童に対して技術的・心理的・音楽的にどのような働きかけをおこなったらいいかわかるようになる。（変声期・声域狭小などへの対応）

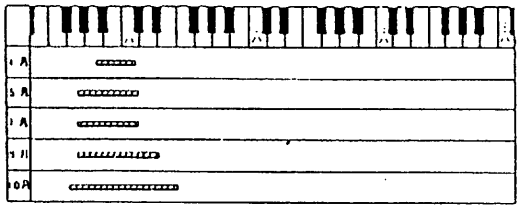
☆ 児童一人ひとりにも個表をもたせ各自の目標をもたせる。（6月・9月・12月・2月調査）各学年の教材の音域表と照らし合わせることによって，めあてをもたせる。

☆ （子どもたちにとって音楽は「かたち」として捉えにくいもの。図工科や体育科のように作品・記録などのかたちで残せないので，「声のカルテ（声域調査表）」として表すことによって自分の声をつかむ。それにより具体的な目標をもつことができる。）

音域調査表



M 組の音域表（個表）



5年教材音域一覧表

No.	曲名	調	音域	日数
1	世界のこどもたち	G	ニ1	8
2	代々木八幡	F	ハ1	9
3	四季のうた	C	ホ1	7
4	こいのぼり	F	ハ1	9
5	こめ山せる	C	ハ1	9
6	緑の仲間で	F	ト1	5
7	ばらばらっぱい	F	ハ1	9
8	ぼくらのて	F	ヘ1	6

6年教材音域一覧表

No.	曲名	調	音域	日数
1	ゆかいに歩けば	C	ハ1	10
2	誕生日	B	ニ1	11
3	地球の体	B	ニ1	9
4	月の夜	C	ハ1	9
5	こめ山せる	C	ハ1	9
6	カリンカ	d	ハ1	10
7	チムチムチェリー	d	ニ1	8
8	わらべ唄の子	D	イ1	13

音楽能力診断カルテ　　年　組

項目＼月日			
声域（パート）	四戸区（　　）	四戸区（　　）	四戸区（　　）
先生のひとこと			

7. 発声のしくみ

☆ 発声のしくみについて医学的・物理的方面からも触れ興味をもたせる。（ビデオ）

(1) 声帯を胃カメラで撮影し示す。

(2) 頭部の断面から，共鳴胴の所在を確認させる。

(3) オシロスコープを利用し共鳴の様子を理解させる。

歌う時の口型・顔の表情の大切さについて具体的に理解させる。

Ⅳ 授業実践

学 習 指 導 案

平成5年6月15日（火）3校時
宮城小学校6年3組（男子18名 女子19名）
指導者 石 嶺 球 代

1. 題　材　曲のしくみ

2. 指導目標

(1) 短調と長調の2つのふしで曲ができていることを感じながら，楽しく歌ったり鑑賞したりさせる。

(2) 互いに歌い，聴き合いながら速さの工夫をして表現する楽しさを味わわせる。

3. 教　材

◎ カリンカ（楽団カチューシャ訳詞　ロシア民謡）

◎ ファランドール（組曲「アルルの女」第2から　ビゼー作曲）

4. 指導にあたって

(1) 教材について

≪カリンカ≫

ニ短調，四分の二拍子，三部形式

ロシアには農民の生活を歌った民謡が数多く生まれているが「カリンカ」はそれの代表的なものの1つである。村娘の朝の仕事のひとときを歌ったさわやかな民謡で，〝カリンカ　カリンカ〟と繰り返されるリズミックな歌い出しと，中間部の美しいメロディーは対照を成して〝速さの工夫〟の題材として適切であると考える。

また，ＡＢＡの三部形式で「短調のゆったりしたテンポで始まったメロディーが最高潮に達すると，突然美しい長調の旋律になり，再び短調の旋律に戻る」という具合に調の違いの感得や曲のしくみ等を理解するのにも大変適した教材であると考える。

4月5月の教材がゆったりとした曲だっただけに（「越天楽今様」「おぼろ月夜」）変化に富んだこの曲に児童は興味をもって取り組むのではないかと思う。

≪ファランドール≫

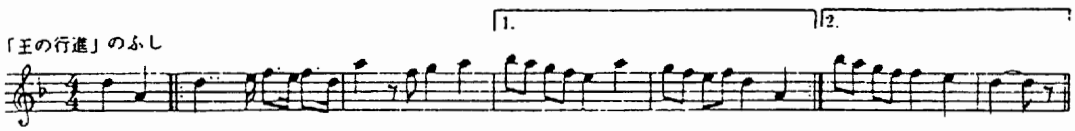
ニ短調，四分の四拍子，ビゼー作曲（鑑賞教材）

組曲「アルルの女」の中の終曲にふさわしい盛り上がりをもった曲である。この曲は南フランス・プロバンス地方の民俗舞曲で，フランス民謡「王の行進」（短調・楽譜1）と，「馬のダンス」（長調・楽譜2）からなり，次のような組み合わせでできている。

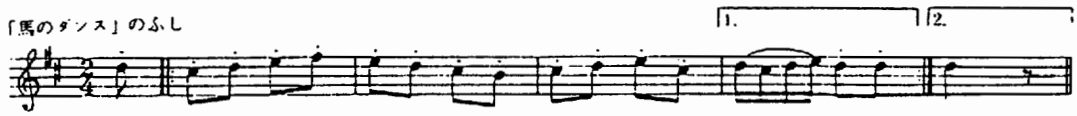
☆　王の行進の前半（カノンを含む）――馬のダンス――王の行進の前半――
――馬のダンス――王の行進の後半――馬のダンスの後半――経過句
――両主題の重なり――コーダ

このような曲の構成から，長調と短調をききわけたり，曲の速さの工夫を楽しく感じ取らせるのにふさわしい教材と考える。（同じテーマでもはじめは堂々と，次第にはやく，しかも音の厚みも増しながらフィナーレへ）

楽譜１　「王の行進」のふし



楽譜２　「馬のダンス」のふし



(2)　児童について

実態調査によると歌唱より器楽や音づくりの方を好む学級である。（女子は器楽，男子は音づくりの方を好む。）また自分の声は「きれいな方ではない」が「もっと高い声，美しい声も出るようになりたい」という前向きの子が多い。

男子は陽気で元気者が多い，いつもにぎやかである。対照的に女子は，興味関心はあるが発表はなかなかみられない。

「どの音まで声がでるか調べよう」と声域調査（声のカルテ）をした時から自分の声や響く声に関心をもち，高い音も出し方を工夫しようとする児童が増えてきている。

(3)　指導について

音楽の美しさは，リズム，拍子，旋律，調，和声，速度，強弱，音色などが互いに溶け合い，絡み合い，変化し，それが統合されて生ずる美しさであると考える。

ここでは音楽の中でも心をかきたてる要素のひとつとなっている〝速さ〟〝転調〟に焦点をしぼり，その変化のおもしろさを感じさせたい。自分で表現を工夫し，互いに聴きあうなかで積極的に表現する楽しさを味わわせたい。決して理屈を教え込むのでなく（ヘ長調・ニ短調・速度），感覚（音）をとおして，また鑑賞活動も組み入れて学習することで表現のイメージを広げさせたい。

「カリンカ」のＡの部分はすべて単純な３度音程のハーモニーばかりなので，Ｂの部分のところだけ二部合唱させることにした。

5. 指導計画（5時間）

	「カリンカ」　「ファランドール」	
第1次（2時間）	• 範唱を聴いて曲想をつかむ（強弱，速度，調などの変化を曲の構成と結びつけて感得させる。） • 歌詞の内容を理解する。 • 演奏の順序を理解する。 • 主旋律の歌詞唱。（歌唱の基礎の確認 ――― 姿勢・表情・口型・呼吸） • 三部形式（ＡＢＡ　短調 ― 長調 ― 短調）を感覚的に理解させる。 • 短調と長調の２つのふしの感じの違いを把握する。 • 「発声と共鳴」のＶＴＲをみて，声のひびかせ方について具体的に知る。 • Ｂの副旋律の視唱をする。	カリンカ
第2次（3時間）	• ２つのふしに気をつけながら鑑賞する。（□，△のカラーカードを使用） • 主なふしを口ずさんだり楽器で演奏したりする。 • 短調と長調の相違を感じ取りふしの重なりの美しさを味わう。 • ２つの主題の組み合わせについて話し合う。 • 速度や強弱，曲の盛り上がり，楽器の音色などについて話し合う。 • Ｂの二部合唱のところの音をしっかりとる。 • 「カリンカ」にふさわしい速さをグループで工夫する。 • Ａ―Ｂ―Ａ（短―長―短）の変化を感じ取って楽しく二部合唱する。 • 同じ旋律でも〝速さ〟によって曲の感じが違うことに気付く。 • 速度・強弱・転調の変化を生かす表現の工夫。 • 鑑賞や他の人の表現を参考にしながら速さを工夫して「カリンカ」を歌う。 • 二声のバランスを工夫して二部合唱する。	ファランドール 本時 ファランドール カリンカ

6. 本時の指導（第２次４時）

(1) ねらい

速さを工夫して「カリンカ」を楽しく歌える。

(2) 展　開

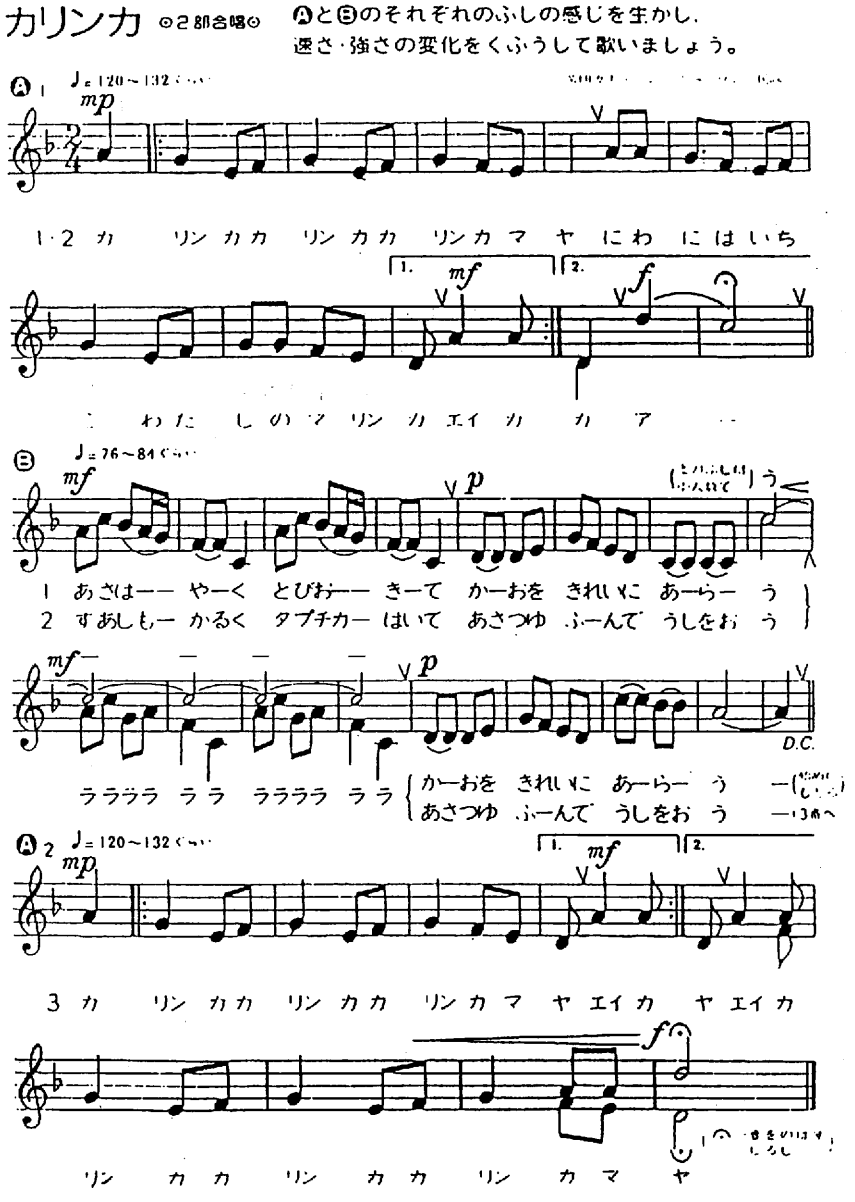
	学習活動	指導上の留意点	形態	資料
やる気を持つ心を開いて	1. 愛唱曲を歌う 「あの青い空のように」 「気球に乗ってどこまでも」	• 笑顔で明るい気分で歌わせる。	一斉	
感じ取る	2. 「カリンカ」を歌う	• 歌詞を大切に歌わせる。 • Ｂの副旋律の音がしっかりとれているか確かめる。		
	3. 「カリンカ」を定速で歌う。	• 他に♩＝208や♩=60などとも比較して「カリンカ」にふさわしい速さを考えさせる。		メトロノーム
めあてをもって取り組む	4. 本時のめあてをもつ。 速さを工夫して 楽しく歌おう • 楽譜に工夫を書き込む。	• 一曲全部を工夫するのでなく〝ここの部分をこうする〟と，ポイントをしぼって歌わせる。 • 自分たちの歌いやすい音域で歌わせる。 • 少しくらいの音程のずれやきれいな声で歌おうということなどに気をとらわれず速さの工夫に焦点をあてさせる。	個 グループ	プリント ＯＨＰ
	5. 各グループに分かれて練習する。	• リーダーを中心に練習させる。 • 前時までの学習を想い起こさせ工夫させる。		
	6. 表現を工夫しながら演奏し，聴きあう。	• 他のグループがどこを工夫しているかききとらせる。（時間がない時は次時におこなわせる）	一斉	

まとめ	7. 本時のまとめをする。	・まとめの演奏をし，確かめる。 ・活動の成果を認め，「私のあしあと」を記入させ次時への意欲を高めたい。	一　斉 個	自己評価カード

(3) 評　　価

◎ 協力して「カリンカ」の速さを工夫したか。

◎ 曲のしくみ（調・速さなど）に気をつけて楽しく表現したか。



7. 授業研究会の記録

(1) 授業者の反省

- 学習のしつけやグループ編成の工夫が不充分なためグループの話し合いが円滑にできないグループが2・3あった。(グループ間の差があった)
- 「カリンカの速さを工夫する」場面でメトロノームを使用したが曲の途中で（Aまで）切ったので意図が充分に達成されないままになった。
- 楽譜に工夫したことを書き込む作業は初めてだったので戸惑っていた。
- 長調，短調の違いについて理論的にはまだよく理解できてないが，音（感覚）としては良く理解できている。（32名）また短調の音の響きを単に「暗いかんじ」「寂しいかんじ」とだけ捉えるのでなく6年生の段階ではその曲のリズムや，テンポの違いで曲の雰囲気は変わってくるのだということも気づいて欲しいという気持ちがあった。
- 発表はできないだろうと思っていたが，指揮者入りで発表のできる班が登場して次時へのよい刺激になった。

(2) 感想・意見

- 児童の表情が生き生きして動作が機敏であった。
- 子供たちを授業にのせる雰囲気作りが上手で楽しい授業だった。
- ＴＰで曲のつくりの変化を示したのはよかった。
- メトロノームを利用してこの曲に最もふさわしい速さを考えさせたのは効果的だった。
- もっといきいきと子供たちが歌うために，楽器（タンバリン・アコーディオン等）やかけ声など（ヘイ！）をいれて工夫させるとよかったのではないか。
- 「わたしのあしあと」（自己評価カード）は効果的で，皆一生懸命書き込んでいた。
- 班のばらつきがあった。女子がリーダーのところはわりあいまとまっていたが，男子がリーダーの班は練習がうまくいかないところが多かった。

(3) 指導助言

＜成　　果＞

- 教師の開かれた教授法であった。「心を開いて歌える」という安心感があった。6年生の返事の声がだんだん変わってくるのがわかった。（きこえた音の高さで返事する方法）
- 教師が児童の能力を引き出す発問方法だった。
  「どうだったか」「どう違うのか」「どうしたらいいのか」等，こどもに考えさせる手法だった。
- 教師の助言のしかたがよい。的を得ている。悪いところはいわずよいところを具体的にほめて育てている。
- 自己評価表をつけさせたのはよい。興味関心態度がわかる。観察法と自己評価表でより確実な評価となる。自己評価表でつぎの自分の新しい希望（めあて）をみつけることができる。

＜課　　題＞

- 教材を与える工夫が必要である。グループに配った楽譜に速度記号はないほうがよい。（今回のように速度記号についてまだ指導していなくても）
  またメトロノームかテープレコーダーを６グループ分用意して自分達でフィードバッしながら学習するともっと意欲的になったのではないか。
- 発表の工夫 ―「私たちはここのところをこうしました」とＴＰを使って発表すると聴く人もわかりやすいし，関心をもって聴くことができるのではないか。（ここでは画用紙大の楽譜に記入したが，後のグループ発表のときその方法を取り入れると非常に効果的だった）
- 何をもとにして工夫するか ― ことば，詩のイメージを大切にするということ。楽譜プラス詩のイメージで歌うと自然にその曲の曲想に気づくのではないだろうか。
- 工夫したことを楽譜に書き込むというのはある程度記号化するとイメージをあらわしやすいのではないか。（音づくりへの発展性）

≪授業風景≫

（まとめるため指揮をやりはじめた）

（グループの話し合い）

（ピアノの周りで歌う）― 導入の工夫

（グループの話し合い）

V　研究のまとめと今後の課題

成　果

(1)　「学習のめあて」をもたせることにより児童の活動が積極的になった。

(2)　「声のカルテ」（声域調査）や「発声のしくみ」（ビデオ）により自分の声に関心をもつようになった。教師の指示待ちでなく声の響きを少しは意識するようになった。

(3)　「自己評価カード」や「相互評価カード」を活用することにより児童一人一人の到達度・関心，意欲の状態が把握できるようになった。→フィードバック。

(4)　教育機器（ＯＨＰ・ビデオ等）の利用で活気のある授業になった。

課　題

(1)　グループ編成の工夫 ―― ☆リーダーの育成が必要である。

(2)　工夫したことを楽譜に書き込んでいく，絵譜で表すなどの工夫 ―― 創り上げたものを記録に残す工夫。

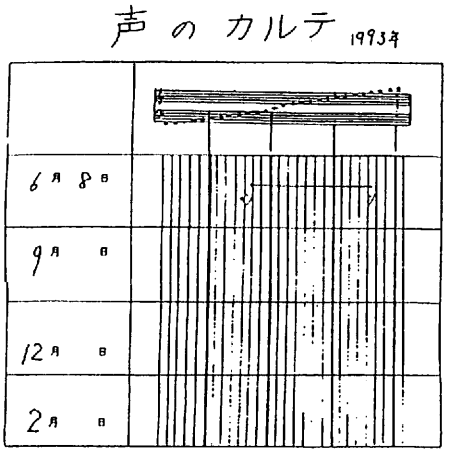
(3)　自分や友達の表現の「よさ」に気づき，更に自己の表現に生きて働く力とするため「聴き合う場」の工夫。

(4)　指揮の指導 ―― 何のために（曲の速さ・強弱・曲の始めとおわりの合図）
単に２つ，３つと振るのでなく自分たちの意志を伝えるもの，まとめるものとして捉える。

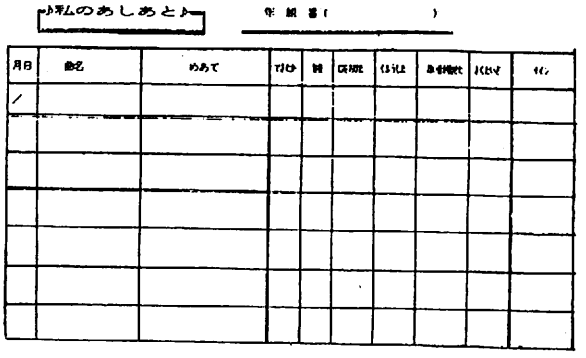
(5)　発問・助言の工夫 ―― 教師の感性が問われるところである。

≪主な参考文献・引用文献≫

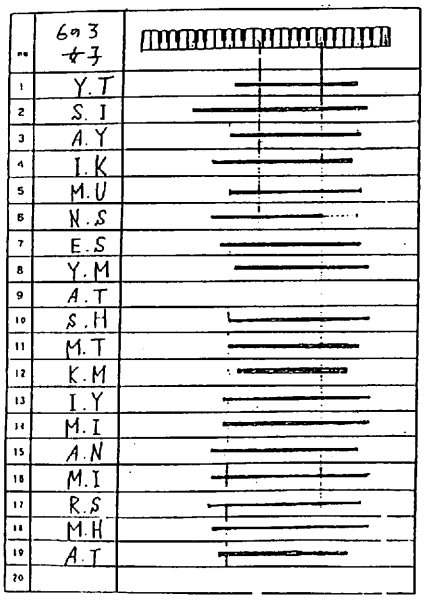
「音楽科教育実践講座」（豊かな歌声）	小原光一著・ニチブン	1992
（音楽科の評価）	同　上　・同　上	
（授業の工夫）	同　上　・同　上	
「音楽科グループ学習」	竹下英字著・明治図書	1991
「与えられる音楽からの脱皮」	三好　勝著・音楽之友社	1984
「自立する子ども」	楠瀬敏則著・音楽之友社	1991
「新学習指導要領の指導事例集 ―小学校音楽科　新しい表現の指導―」	小原光一著・明治図書	1990
「音楽の個別化・個性化指導」	小原光一著・明治図書	1987
「新しい音楽＜教材　アイディア　授業づくり＞」	八木正一著・国土社	1991
「音楽科教え方読本」	今成睦夫著・音楽之友社	1991
「研究紀要」	沖縄県立教育センター	1989
「個人差に応じた新しい学習指導の展開」	・ぎょうせい	1989
「研究紀要」	琉球大学付属中学校	1989
「ひとりひとりを生かす」	菅原克己著・音楽之友社	1985

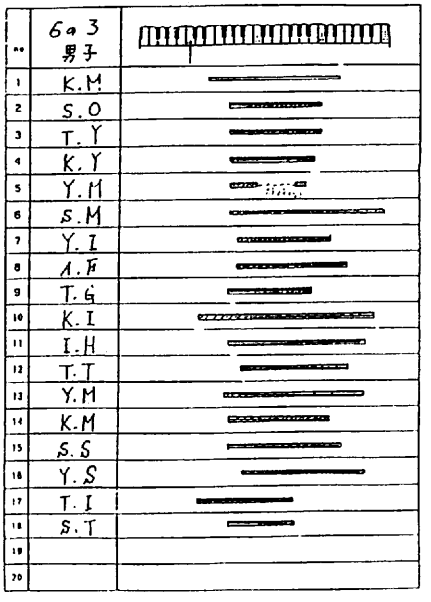


宮城小 6の3 津根由美香



声のカルテ一覧表





♪カリンカの表現の学習をとおして♪

6の3 い番 名前（[illegible]）

感想をかきなさい。（共鳴のビデオを見たこと・班の友達と表現を工夫したこと・曲の変化）

ぼくは共鳴のビデオを見て初めてわかったことがあります。
おてを鳴らしくうどうの所へ近ずけるとすくびしさがいいなと思いました。
考えてみると せまい所と広い所で歌った音の大きさは ぜんぜんちがいます。
先生から目や鼻を大きくしてと言われたのを見ればうやってわかりました。
わうきっしょうと思いました。

♪カリンカの表現の学習をとおして♪

6の3 |7番 名前（与世田泉）

感想をかきなさい。（共鳴のビデオを見たこと・班の友達と表現を工夫したこと・曲の変化）

私は、自分の声のカルテをみて、こんなにも高い声が出せるとは思いませんでした。
そうやって、自分の声の高さはどれぐらいであるかをためしてみてもいいなと思いました。
こんどやるときは、どういうふうにやるかたのしみです。
カリンカの曲を工夫したのでは、なんか、私たちだけの曲みたいなかんじでとても楽しかったです。
でも、とてもきんちょうしていました。（みんなの前で発表するから）
ほかのはんのをきいてよく工夫されているなあと思いました。

★アンケート ☆……（　　）♪♪♪♪♪♪♪ 6の［　］［　］

(1)きょうの授業についてあなたにあてはまるものに、○をつけなさい。（一の上につける）

	◎	○	△	×
①楽しかった。				
②高音と長音の違いがわかった。				
③いっしょうけんめい取り組んだ。				
④助け合った。（友達 グループ）				

(2)きょうの授業で「よかったな」と思うことはどんなことですか。

(3)今日の授業で「いやだな」とおもったことはどんなことですか。

(4)あなたは、次の時間どういうことをがんばりたいですか。

(5)これから先生がひく曲は長音ですか、短音ですか。

①番目（　　）　②番目（　　）　③番目（　　）

♪カリンカの表現の学習をとおして♪

6の3 番 名前（北嘉祥子）

感想をかきなさい。（共鳴のビデオを見たこと・班の友達と表現を工夫したこと・曲の変化）

・共鳴のビデオを見て、ちーんだったらはこの中では、ちーんとすごいひびきだったので私もできるかなあと思いました。
・先生に、目、はな、耳、口をあけなさいとが言っていました。
先生の声はよくひびきました。
でも私はあまりひびかなくて、目、はな耳、口あいてないのかなあと思いました。

♪ グループ発表アドバイスカード ♪

（　）年（　）組（　）番 名前（　　）

友だちのグループの良かったところや、直したら良くなるところを教えてあげよう！

テーマ	速さを工夫してぼくの、わたしのカリンカをつくりあげよう。	
G	良かったところを教えてあげよう	直したら良くなるところを教えてあげよう
1		
2		
3		
4		